

## 本学教員のディプロマ・ポリシーに関する意識 —アンケート調査に基づく報告—

河井 正隆\*, 市川 哲

明治国際医療大学基礎教養講座人文科学・外国語ユニット

**要 旨** 【目的】今後のディプロマ・ポリシーを再考する基礎資料を得ることを目的に、本学におけるディプロマ・ポリシーに対する教員意識調査を実施した。  
【方法】調査対象は、本学の教員106名であり、2019年10月に実施した（回収率48.1%）。  
【結果・考察】結果の一部を次に述べる。1つに、教員はディプロマ・ポリシーをある程度理解している。2つに、約50%の教員が授業内でのディプロマ・ポリシーをある程度意識している。3つに、初年次生と上級生を比較すると、ディプロマ・ポリシーに基づく学生の学力イメージは上級生の学力イメージが約60%以上も高くなる。4つに、ディプロマ・ポリシーに関する重要なキーワードとして、教員はカリキュラム、知識の積み上げ、関連づけ、他者に示す力を挙げている。全体的に、本学教員のディプロマ・ポリシーに対する意識は肯定的であり、今後は教学マネジメントとの関連で、その内実が求められるところである。  
【結語】本調査から、本学教員の傾向を知ることができた。今後は、3つのポリシーとの有機的関連性のもと、教学マネジメントの足場作りが課題である。

**Key words** ディプロマ・ポリシー Diploma Policy, 意識調査 Awareness Survey, 教員 Faculty, 大学 University

### 1. はじめに

令和2年、文部科学省中央教育審議会大学分科会から「教学マネジメント指針」<sup>1)</sup>が公表された。教学マネジメントとは「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」と定義され、3つの方針（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）に基づき、学生主体の教育の実現、社会に対する説明責任を果たしていく大学運営などが挙げられ、その真剣な検討と取り組みを促す目的で指針は作成されている。さらに、3つの方針は教学マネジメントの確立に当たって最も重要とされ、学生主体の教育の質向上を図る基点とも位置づけられる。特に「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）は、具体的かつ明確な記述が求められている。

そこで、本研究ではディプロマ・ポリシーを中心課題とし、はじめに、河井ら<sup>2)</sup>の論を下敷に、まずその歴史的な流れを以下に概括しておく。

今から遡るとこと約15年、大学教育の質保証を構築すべく中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」（2005年）<sup>3)</sup>が3つのポリシーを提示し、ディプロマ・ポリシーの明確化、そしてPDCAサイクルにより実効性のあるポリシーに転換するため、カリキュラム・ポリシーやアドミッション・ポリシーとの有機的関連性を強調した。さらに、3年後の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008年）<sup>4)</sup>では、「今なぜ学士課程教育か」のテーマのもと、入学・在学・卒業（学位授与）の文脈で一貫性のある教育課程を求めた<sup>5)</sup>。また、同答申の「第2章 学士課程教育における方針の明確化」において、「学生が修得すべき学習成果を明確化することにより、『何を教えるか』よりも『何ができるようになるか』に力点が置かれている」とし、伝統的な教員スタイルである「何を教え

\*連絡先：〒629-0392 京都府南丹市日吉町  
明治国際医療大学基礎教養講座人文科学・外国語ユニット  
E-mail: m\_kawai@meiji-u.ac.jp

るか」以上に、学生が「何ができるようになるか」に重点がシフトされ、今日に至る大学教育の質保証のパラダイム転換が図られた<sup>6)</sup>。そして、2016年3月、中央教育審議会大学分科会大学教育部会の「『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー)、『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー)及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン」により、2017年4月から各大学のそれら3つのポリシーの公開および各ポリシーとカリキュラムとの有機的関連性を持つ教育課程の運用が求められることとなる<sup>7)</sup>。

それら3つのポリシーのなかで、主にディプロマ・ポリシーは、学部・学科の教育目的に沿って具体的に養成すべき人材像を示した記述であり、授業実践としてシラバスに反映される。つまり、ディプロマ・ポリシーで示される記述内容は、シラバスでは具体的な到達目標として明記され、ディプロマ・ポリシーの達成を保証する内容となる。このことは、カリキュラム・ポリシーにも繋がる。つまり、教育課程全体の体系化・整合性が求められ、3つのポリシーが有機的関連性をもちながら、学生は何かできるようになるのかへ、教育成果の重心がシフトされる。換言すると、日常の授業実践から学生に対して、「このぐらいは出来るようになってほしい」「この程度のことは身につけて欲しい」などの思いは、教員の誰しもが持つものである。その思いの具現化が、いわゆるディプロマ・ポリシーともいえる<sup>8)</sup>。

以上のような論考を踏まえ、大学教育研究に目を移すと、3つのポリシーに関する論文などが近年数多く報告される<sup>9)</sup>。とはいえディプロマ・ポリシーに焦点を当てた研究では、学生自身の達成度の分析に特化した報告<sup>10,11)</sup>が主流であり、教員自身を対象とする研究は、管見を述べると見かけない。前述したように、教員自身が思い描く学生への願いという観点から、教員側の立場からのディプロマ・ポリシーに関する調査研究も重要である。

そこで本研究では、筆者の勤務校において、各学部・学科におけるディプロマ・ポリシー(以下、DPという)に対する教員自身の捉え方を事例的に調査し、今後の本学におけるDPを再考する基礎資料を得ることを目的に調査を実施した。結果の分析は、本学の教育課程を見直す上で重要であり、DPに対する教員意識の事例的研究としても意義あるものと思われる。

## II. 本学の建学の精神・教学の理念とDP

本学の建学の精神は、『和の精神』を真髄となし、東西両医学を有機的に関連づけて、社会に貢献できる医療人を育成する」であり、教学の理念は、主に「心豊かな医療人を育成する」ことにある。

建学の精神・教学の理念を踏まえ、2013年度と2020年度に、各学部・学科及び研究科の3つのポリシーは見直され、広く内外に公開され現在に至る。さらに、DPとシラバスに記載する到達目標との関連性の明記は、2020年から全学的に義務づけされた。しかし、学生のDPの達成度などの検討は、学修成果の可視化に連動させる上で喫緊の課題となっている。

## III. 本調査の概要

### 1. 対象および方法

本学の3学部4学科・1センターの教員106名(非常勤講師は除く)に対して、令和元年10月に留置法にてアンケートを実施した。

なお、1センターとは学部等の教育研究、教養系および医学系科目を担当し、教養教育の充実や横断的に基礎・応用研究を推進する目的で設置された部署である(教員組織)。また、センター教員は他の1学部・学科にも所属する(教育組織)。よって、本調査で求めたDPへの回答は、学部・学科教員である教育職員の立場となる。

### 2. 本学のDPの構造

本学のDPは、各学部・学科共通で次に示す5つの領域から作成されている。それらは、「知識・理解」「思考・判断」「関心・意欲」「態度(・人間性)」「技能・表現」であり、各領域には学部・学科により若干差はあるが、2項目程度の到達目標が設定されている。

イメージが容易なように、ある学部のDPを例として提示する(表1)。なお、学部・学科が推測できる表現(国家資格名)を避けるため表中には○○で表記した。

### 3. DPに関する設問項目

アンケートにおけるDPに対する設問項目は、次の4つである。①教員の理解度、②教員が授業内で意識する度合い、③必要と思うキーワード、④1年次と4年次(D学科のみ3年生)を比較したDPの達成度。

表1 ディプロマ・ポリシーの一例

1. 知識・理解
・医療人の基盤となる幅広い教養を身につけている。 ・〇〇学，現代医学の幅広い知識を有し，〇〇に必要な基本的知識と技術を修得している。
2. 思考・判断
・現代医学に基づく病態把握により〇〇施術の適応・不適応を的確に判断して対応することができる。 ・自ら探求すべき課題を見つけ，問題解決に取り組むことができる。
3. 関心・意欲
・常に進歩変化する医療や社会情勢に関心を持ち，自ら情報収集を行い，生涯を通じて自らを高めることができる。 ・〇〇の社会的役割・使命を遂行して国民の健康維持や疾病予防，医療と地域社会の課題に貢献する意欲を持っている。
4. 態度・人間性
・医療人としての自覚と人間性豊かで倫理感と責任感に富む人格を身につけている。 ・社会人としての常識と感性を身につけている。
5. 技能・表現
・〇〇として基本的な病態把握と安全で適切な〇〇施術が実践できる。 ・高いコミュニケーション能力を身につけ，医療チームの一員としての役割を意識した行動ができる。

※表中の〇〇は，国家資格名を指す。

表2 学科別にみる回答者の職位

学 科	教授・特任教授	准教授・特任准教授	講師	助教・助手	% (n)
A 学科	40 (2)		20 (1)	40 (2)	100 (5)
B 学科	40 (4)	10 (1)	20 (2)	30 (3)	100 (10)
C 学科			60 (3)	40 (2)	100 (5)
D 学科	60 (3)	20 (1)		20 (1)	100 (5)
センター	46.2 (6)	15.4 (2)	30.8 (4)	7.7 (1)	100.1 (13)
合計	39.5 (15)	10.5 (4)	26.3 (10)	23.7 (9)	100 (38)

※学科，職位のいずれかに「不明」がある場合はクロス集計結果から除く。

#### 4. 倫理的配慮

教員に実施したアンケートは無記名方式で個人は特定されないこと，また，回答は自由意志であり，さらには，DPを再考する基礎資料の収集として協力を求めた。結果の公表については，本調査の回答により同意したものとする旨，アンケート用紙に明記した。

なお，本調査は本学のヒト研究倫理審査委員会の承認 (No. : 2019-020) を得て実施したものである。

### IV. 結果と考察

#### 1. アンケートの回収率

本学教員 106 名中 51 名から回答を得た (有効回収率 48.1% : 51 票 / 106 票)。

#### 2. 回答者の属性

##### (1) 職位 (全体)

回答を得た教員の職位は，「教授・特任教授」31.4% (16 名)，「准教授・特任准教授」9.8% (5 名)，「講師」19.6% (10 名)，「助教・助手」17.6% (9 名)，

「不明」21.6% (11 名) と，教授クラスの回答が 3 割と多くの回答を得た。

##### (2) 学科別教員の回答率 (全体)

回収票から各学科の占める割合を次に示す。「A 学科」13.7% (7 名)，「B 学科」25.5% (13 名)，「C 学科」11.8% (6 名)，「D 学科」13.7% (7 名)，「センター」27.5% (14 名)，「不明」7.8% (4 名) となりセンター所属教員が一番多い。

また，所属別で職位をみると表 2 に示すとおりである。概括すると，A 学科と B 学科は「教授・特任教授」「助教・助手」「講師」の順に回答者が多く，C 学科は「講師」「助教・助手」に偏り，D 学科は「教授・特任教授」と「講師」「助教・助手」に二分する。センター教員では各職位から回答が寄せられた。

##### (3) 教育歴

教員の教育歴については，「～5 年」21.6% (11 名)，「6 年～10 年」17.6% (9 名)，「11 年～15 年」11.8% (6 名)，「16 年～20 年」13.7% (7 名)，「21 年～25 年」

3.9% (2名), 「26年以上」23.5% (12名) と, 教員歴26年以上が23.5%と多くを占める結果となった。教員歴を学科別でみると表3となる。

このような回答者属性(表1・2)のバイアスを念頭に, 次節以降に示す結果を解釈する必要がある。

(4) DPに関するクロス集計結果(学科別)

まず, 前述で示したDPの5つの領域(例:表1)を教員自身はどの程度理解し, 意識しているのか, また, 学生はどの程度その領域で示す到達目標に達しているのか, それらに対する教員自身の主観的判断を学科別でみることにする。

1) 学科別教員にみるDPの理解度

教員はどの程度DPを理解しているのか, 学科別の結果が表4である。

表4に示すとおり, 教員のDPに対する理解度を

全体(n=47)で概観すると, 若干領域により差異がみられるが「まあ理解している」に集中する。

また, 理解度をDPの領域別にみると「A. 知識・理解」から「E. 技能・表現」の各領域に関してはいずれも, 全体として「理解している」「まあ理解している」の肯定的回答がいずれも80%を上回る(A. 知識・理解:85.5%, B. 思考・判断:87.6%, C. 関心・意欲:83.4%, D. 態度(・人間性):85.5%, E. 技能・表現:81.3%)。

とくに, A学科(n=7)の理解度は各領域で「理解していない」「あまり理解していない」という否定的回答は皆無であり, 「まあ理解している」「とても理解している」の肯定的回答がすべてという結果であった。また, D学科(n=7)でも「まあ理解している」を中心に高い理解度を示し(約86%~100%), B学科では, 各領域に対して回答項目がば

表3 学科別に見る回答者の教育歴

学 科	~5年	6年~10年	11年~15年	16年~20年	21年~25年	26年以上	学科合計
A学科	28.6 (2)	14.3 (1)		14.3 (1)		42.9 (3)	100.1 (7)
B学科	16.7 (2)	8.3 (1)	25.0 (3)	16.7 (2)	8.3 (1)	25.0 (3)	100 (12)
C学科	33.3 (2)	66.7 (4)					100 (6)
D学科	57.1 (4)	14.3 (1)		14.3 (1)		14.3 (1)	100 (7)
センター	7.1 (1)	14.3 (2)	14.3 (2)	21.4 (3)	7.1 (1)	35.7 (5)	99.9 (14)
合計	23.9 (11)	19.6 (9)	10.9 (5)	15.2 (7)	4.3 (2)	26.1 (12)	100 (46)

※学科, 教育歴のいずれかに「不明」がある場合はクロス集計結果から除く。

表4 学科別教員にみるDPの理解度

領 域	回答項目	A学科 (7)	B学科 (13)	C学科 (6)	D学科 (7)	センター (14)	全体 (47)
A. 知識・理解	理解していない		7.7%				2.1%
	あまり理解していない		15.4%	16.7%		20.0%	12.5%
	まあ理解している	57.1%	53.8%	66.7%	85.7%	73.3%	66.7%
	とても理解している	42.9%	23.1%	16.7%	14.3%	6.7%	18.8%
B. 思考・判断	理解していない		7.7%				2.1%
	あまり理解していない		15.4%	16.7%		13.3%	10.4%
	まあ理解している	42.9%	53.8%	66.7%	100.0%	80.0%	68.8%
	とても理解している	57.1%	23.1%	16.7%		6.7%	18.8%
C. 関心・意欲	理解していない		7.7%				2.1%
	あまり理解していない		23.1%	16.7%		20.0%	14.6%
	まあ理解している	57.1%	46.2%	66.7%	100.0%	66.7%	64.6%
	とても理解している	42.9%	23.1%	16.7%		13.3%	18.8%
D. 態度(・人間性)	理解していない		7.7%				2.1%
	あまり理解していない		23.1%	16.7%		13.3%	12.5%
	まあ理解している	57.1%	46.2%	66.7%	100.0%	73.3%	66.7%
	とても理解している	42.9%	23.1%	16.7%		13.3%	18.8%
E. 技能・表現	理解していない		7.7%				2.1%
	あまり理解していない		30.8%	16.7%	14.3%	13.3%	16.7%
	まあ理解している	57.1%	38.5%	83.3%	85.7%	80.0%	66.7%
	とても理解している	42.9%	23.1%			6.7%	14.6%

※学科, 領域のいずれかに「不明」がある場合はクロス集計結果から除く。

※( )内は回答者数を示す。

らつき、C学科およびセンターでは一部の教員に「あまり理解していない」と回答する教員が存在した。

このように、学科間で教員のDPへの理解度に差異があり、そのことは、次節で述べる授業内でDPを意識する度合いにも影響を与えることになる。

2) 学科別教員にみる授業におけるDPの意識度

次に、教員が日常の授業においてどの程度DPを意識し、授業実践を行うのか、その意識の度合いを問うた結果が表5である。

表5から、全体としてDPの各領域において、教員が授業実践の中でDPを意識する度合いは、「まあ意識している」が一番比率の高い回答項目であった(約40%~50%)。

「とても意識している」と「まあ意識している」を合わせた肯定的回答をみると、概ね約70%の教員が意識している(A. 知識・理解: 74.5%, B. 思考・判断: 69.8%, C. 関心・意欲: 70.2%, D. 態度(・人間性): 72.4%, E. 技能・表現: 70.2%)

学科別でみると、A学科(n=7)は前述で示したDPの理解度と同様、肯定的回答に偏る。一方、他の学科などでも同様に回答項目にばらつきをみせるが、とくにD学科(n=7)の理解度(表4)で示された結果にはなかった否定的な回答がみられ、回答項目のばらつきが顕著となった。

これらから、DPの理解はあったとしても、教員

自らの授業実践でその意識の持ち様には乖離があることが示された。しかも、学科自体の特性もあろうが、翻って約30%の教員はDPを具現化する具体的な実践が行われていないことが判明した。

以上を踏まえ、本学としてDPを議論するFD研修会の充実や、教員への普段の働きかけが一層求められる結果となった。

3) 学科・学年別でみたDPと学生の学力イメージ(1年生)

学科ごとのDPに即して教員はどのように1年生の学力をイメージしているのか、その把握状況を学科別に問うた結果が表6である。なお、本調査における学力とは、雑ばくではあるが「高等学校教育修了までに修得すべき知的能力」と定義した。

ここでは、まず1年生に対する教員の学力イメージを示し、次節で4年生(一部3年生)の学力イメージを提示する。その意図するところは、学生集団の違いは当然あるものの、初年次生と最上級学年生の比較から、教員が思い描くDPの輪郭がより鮮明になると思われるからである。なお、D学科については2020年度が学科の完成年度となり、本調査の段階では3年生が最上級学年となる。

全体(n=39)では、各領域とも「あまり身についていない」を中心に(A. 知識・理解: 64.1%, B. 思考・判断: 56.4%, C. 関心・意欲: 51.3%, D. 態度(・人間性): 51.3%, E. 技能・表現: 64.1%),

表5 学科別教員にみる授業におけるDPの意識度

領域	回答項目	A学科(7)	B学科(13)	C学科(6)	D学科(7)	センター(14)	全体(47)
A. 知識・理解	意識していない		15.4%				4.3%
	あまり意識していない		15.4%	50.0%	28.6%	21.4%	21.3%
	まあ意識している	42.9%	38.5%		42.9%	50.0%	38.3%
	とても意識している	57.1%	30.8%	50.0%	28.6%	28.6%	36.2%
B. 思考・判断	意識していない		15.4%				4.3%
	あまり意識していない	14.3%	15.4%	50.0%	28.6%	28.6%	25.5%
	まあ意識している	42.9%	38.5%		57.1%	57.1%	42.6%
	とても意識している	42.9%	30.8%	50.0%	14.3%	14.3%	27.2%
C. 関心・意欲	意識していない		15.4%				4.3%
	あまり意識していない	14.3%	15.4%	66.7%	28.6%	21.4%	25.5%
	まあ意識している	71.4%	53.8%		42.9%	42.9%	44.7%
	とても意識している	14.3%	15.4%	33.3%	28.6%	35.7%	25.5%
D. 態度(・人間性)	意識していない		15.4%				4.3%
	あまり意識していない		23.1%	50.0%	28.6%	21.4%	23.4%
	まあ意識している	57.1%	30.8%	16.7%	57.1%	50.0%	42.6%
	とても意識している	42.9%	30.8%	33.3%	14.3%	28.6%	29.8%
E. 技能・表現	意識していない		15.4%				4.3%
	あまり意識していない		15.4%	50.0%	42.9%	28.6%	25.5%
	まあ意識している	57.1%	38.5%	16.7%	57.1%	64.3%	48.9%
	とても意識している	42.9%	30.8%	33.3%		7.1%	21.3%

※学科、領域のいずれかに「不明」がある場合はクロス集計結果から除く。

※( )内は回答者数を示す。

表6 学科・学年別でみた DP と学生の学力イメージ (1年生)

領域	回答項目	A 学科 (5)	B 学科 (11)	C 学科 (4)	D 学科 (7)	センター(12)	全体 (39)
A. 知識・理解	身についていない	20.0%	27.3%	25.0%	28.6%	16.7%	23.1%
	あまり身についていない	60.0%	63.6%	75.0%	57.1%	66.7%	64.1%
	まあ身についている	20.0%	9.1%		14.3%	16.7%	12.8%
	とても身についている						
B. 思考・判断	身についていない	40.0%	27.3%	25.0%	42.9%	16.7%	28.2%
	あまり身についていない	60.0%	63.6%	75.0%	14.3%	66.7%	56.4%
	まあ身についている		9.1%		28.6%	16.7%	12.8%
	とても身についている				14.3%		2.6%
C. 関心・意欲	身についていない	20.0%	27.3%	50.0%	28.6%	8.3%	23.1%
	あまり身についていない	60.0%	54.5%	50.0%	14.3%	66.7%	51.3%
	まあ身についている	20.0%	18.2%		42.9%	25.0%	23.1%
	とても身についている				14.3%		2.6%
D. 態度(・人間性)	身についていない	20.0%	27.3%	50.0%	42.9%	8.3%	25.6%
	あまり身についていない	80.0%	36.4%	50.0%		83.3%	51.3%
	まあ身についている		36.4%		57.1%	8.3%	23.1%
	とても身についている						
E. 技能・表現	身についていない	20.0%	36.4%	25.0%	28.6%	8.3%	23.1%
	あまり身についていない	60.0%	45.5%	75.0%	57.1%	83.3%	64.1%
	まあ身についている	20.0%	18.2%		14.3%	8.3%	12.8%
	とても身についている						

※学科、領域のいずれかに「不明」がある場合はクロス集計結果から除く。

※( )内は回答者数を示す。

一部を除き「身についていない」「まあ身についている」に分散した。さらに、「身についていない」は「A. 知識・理解」23.1%、「B. 思考・判断」28.2%、「C. 関心・意欲」23.1%、「D. 態度(・人間性)」25.6%、「E. 技能・表現」23.1%となり、「まあ身についている」では、「A. 知識・理解」12.8%、「B. 思考・判断」12.8%、「C. 関心・意欲」23.1%、「D. 態度(・人間性)」23.1%、「E. 技能・表現」12.8%となる。

学科別でもほぼ同様に、「あまり身についていない」「まあ身についている」の両者に分散する結果となった。しかし、D 学科 (n=7) においては「C. 関心・意欲」「D. 態度(・人間性)」の2つの領域で「まあ身についている」がいずれの回答項目のなかで最も高い比率(それぞれ42.9%、57.1%)を示し、他学科との相違がうかがわれた。

#### 4) 学科・学年別でみた DP と学生の学力イメージ (4・3年生)

ここでは4年生(一部,3年生)に関する学力イメージを DP に即して述べる。

表7は表6と同様に、学科別 DP で示された領域ごとに対する教員がみた学生の学力イメージである。1年生に対する学力イメージ(表6)と大きく異なる結果となった。

その結果から全体 (n=39) から、各領域において「とても身についている」「まあ身についている」

を合わせた肯定的回答を、比率の高い順で次に列挙する。

それらは、「D. 態度(・人間性)」88.3%、「C. 関心・意欲」81.4%、「E. 技能・表現」79.1%、「A. 知識・理解」74.5%、「B. 思考・判断」67.5%である。

一方、1年生における各領域の肯定的回答(表6)を示すと、「A. 知識・理解」12.8%、「B. 思考・判断」15.4%、「C. 関心・意欲」25.7%、「D. 態度(・人間性)」23.1%、「E. 技能・表現」12.8%のそれぞれであり、4年生(3年生)との推移を求めると次のようになる。

以下の数値は、表7と表6の「全体」に示す「まあ身についている」と「とても身についている」の合計値(%値)を算出し、表7の合計値から表6の合計値を差し引いて求めたものである。

その結果、1年生と4年生(3年生)の比較からその増加率を示すと、「A. 知識・理解」61.7%、「B. 思考・判断」52.1%、「C. 関心・意欲」55.7%、「D. 態度(・人間性)」65.1%、「E. 技能・表現」66.3%となり、各領域において4年生(3年生)で、学力イメージに対する肯定的回答率(「とても身についている」と「まあ身についている」の合計%)が大きく増加する結果となった。

教員の学生に対する学力イメージは、4年生(3年生)では1年生と比べ、「E. 技能・表現」「D. 態度(・人間性)」「A. 知識・理解」が約60%以上

表7 学科・学年別でみた DP と学生の学力イメージ (4・3年)

領域	回答項目	A 学科 (5)	B 学科 (11)	C 学科 (4)	D 学科 (7)	センター(12)	全体 (39)
A. 知識・理解	身についていない		8.3%				2.3%
	あまり身についていない	16.7%	25.0%	60.0%	28.6%	7.7%	23.3%
	まあ身についている	66.7%	58.3%	40.0%	71.4%	92.3%	69.8%
	とても身についている	16.7%	8.3%				4.7%
B. 思考・判断	身についていない						
	あまり身についていない	16.7%	50.0%	40.0%	28.6%	23.1%	32.6%
	まあ身についている	66.7%	41.7%	60.0%	57.1%	76.9%	60.5%
	とても身についている	16.7%	8.3%		14.3%		7.0%
C. 関心・意欲	身についていない		8.3%				2.3%
	あまり身についていない	16.7%	8.3%	60.0%	14.3%	7.7%	16.3%
	まあ身についている	83.3%	75.0%	40.0%	42.9%	92.3%	72.1%
	とても身についている		8.3%		42.9%		9.3%
D. 態度(・人間性)	身についていない						
	あまり身についていない	16.7%	8.3%	40.0%	14.3%		11.6%
	まあ身についている	50.0%	83.3%	60.0%	57.1%	100.0%	76.7%
	とても身についている	33.3%	8.3%		28.6%		11.6%
E. 技能・表現	身についていない						
	あまり身についていない	16.7%	25.0%	60.0%	28.6%		20.9%
	まあ身についている	66.7%	66.7%	40.0%	71.4%	100.0%	74.4%
	とても身についている	16.7%	8.3%				4.7%

※学科、領域のいずれかに「不明」がある場合はクロス集計結果から除く。

※ ( ) 内は回答者数を示す。

表8 DP に必要と思うキーワード

キーワード	A 学科 (6)	B 学科 (13)	C 学科 (6)	D 学科 (7)	センター(13)	合計 (45)
知識	20.0%	16.4%	16.7%	5.7%	13.3%	14.4%
医療人	8.6%	11.5%	13.3%	17.1%	12.0%	12.3%
技術	14.3%	16.4%	10.0%	8.6%	6.7%	11.0%
判断	5.7%	8.2%	10.0%	11.4%	8.0%	8.5%
理解	2.9%	4.9%	16.7%	2.9%	13.3%	8.5%
医療	11.4%	4.9%	3.3%	8.6%	9.3%	7.6%
実践	2.9%	4.9%	13.3%	8.6%	8.0%	7.2%
教養	5.7%	4.9%	6.7%	5.7%	6.7%	5.9%
社会	5.7%	8.2%	0.0%	8.6%	2.7%	5.1%
貢献	5.7%	3.3%	0.0%	8.6%	6.7%	5.1%
社会人	8.6%	3.3%	0.0%	2.9%	8.0%	5.1%
役割	8.6%	6.6%	3.3%	2.9%	2.7%	4.7%
国際	0.0%	3.3%	0.0%	5.7%	2.7%	2.5%
その他	0.0%	1.6%	3.3%	2.9%	0.0%	1.3%
課題	0.0%	1.6%	3.3%	0.0%	0.0%	0.8%

※学科、領域のいずれかに「不明」がある場合はクロス集計結果から除く。

※ ( ) 内は回答者数を示す。

の増加を示し、それら領域に成長がみられると教員が意識していることが窺われた。逆にいうならば、今後は「C. 関心・意欲」の成長が課題ともいえる。

5) DP を表現する際に必要と思われるキーワード

DP を表現する際に必要と思うキーワードを問うた結果が表8である。

合計 (n=45) から上位3つを挙げると「知識」(14.4%)、「医療人」(12.3%)、「技術」(11.0%)の順となる。

医療人の育成を前提する本学としては、専門職としての知識の習得、医療人としての成長、そして専門的技術の習得は欠かすことができない。したがって、DP のキーワードとしてこれらが重視されるのも当然と思われる。

では、学科別ではどうであろうか。先に全体で示した上位のキーワードに挙げられなかった学科独自のキーワードを1つ抽出しておく。

表8 で示したとおり、A 学科では「医療」11.4%、



## V. まとめ：今回の教員意識調査から

本研究では、今後のDPを再考する基礎資料を得ることを目的に、筆者の勤務校においてDPに対する教員自身の捉え方を事例的に調査した。その結果、学科別では若干の違いはあるが、教員全体でみると以下の点が明らかとなった。

第一に、教員にみるDPの理解度においては、DPの領域により差異がみられものの、「まあ理解している」ことがわかった。内田ら<sup>13)</sup>によると、勤務校におけるDP設定後、学生便覧や大学ホームページ、オリエンテーションなどを通して周知等を行うも、その認知度の低さを指摘している。しかし、今回実施した本学の教員に対する調査では、概ね高い認知度（理解度）を示すことが確認できた。

第二に、教員自らの授業実践におけるDPの意識の度合いについては、「まあ意識している」が約半数の比率を示し、肯定的回答としてみると概ね約7割の教員が意識していることが分かった。しかし、DPの理解度は高いといえど、教員自らの授業実践における意識の度合いとは乖離があることも判明した。今後の課題である。

第三に、DPと学生の学力イメージについては、初年次生と上級生との比較において、「E. 技能・表現」「D. 態度（・人間性）」「A. 知識・理解」に関する学力イメージでは、上級生で約60%以上の肯定的イメージを示し、教員から見た学生の経時的な学力像が垣間見られた。

第四に、DPを表現する際に必要と思われるキーワードとして、医療人として医療の場に携わる学力が挙げられ、具体的にはカリキュラム（含、授業・科目）であり、そのなかで知識を積み上げ関連づけ、他者に示せる（表す）力を重視するキーワードが抽出された。

第五に、期待するDPは、医療の場に携わる能力（コンピテンス）の涵養（臨地実習の重視）と、それが可能なカリキュラムの構築といえる。

以上のように今回の教員調査から、一般化はできないものの、本学のDPに対する教員の捉え方を把握することができた。なお、本調査ではDPのみを扱ったが、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、さらにはアセスメントプランといった各方針を有機的に関連させてこそ、大学教育の全体像（教学マネジメント）を議論する足場になると思われる。

その足場作りの論理として「授業実践における『構成主義的統合』」を取り上げ、簡潔に述べてみたい。その構成主義的統合とは、「授業実践において教授

者が意味付与するだけでなく学習者が意味を構成するという考え方と、意図された学習成果を達成するための教授法・学習方法・評価方法を統合して統合するという考え方に立脚する論考である<sup>14)</sup>。さらに、久保田<sup>15)</sup>の言葉を借りるならば「単に新しい教え方、学び方を提示するだけでなく、評価方法、実践研究のあり方などについても再定義を迫る」ものであり、「学習とは主体的に『意味をつくり出していくプロセス』であり、単なる『知識の転移』ではない」とする、いわば大学教育におけるパラダイムシフトそのものといえる。その足場を構築する作業工程そのものがDPに対する意識や理解といえる。今回の教員調査では、概ねそれらの実情をうかがうことができた。

最後に、本調査から本学教員の傾向を知ることができた。今後は、3つのポリシーとの有機的関連性のもと、教学マネジメントの足場作りが課題である。

謝辞：本アンケートにご協力をいただいた本学教員の皆様に深謝いたします。

### 注

※：教員のDPに対する自由記述（※文中の○○は、国家資格名を指す）。

・1年次から基礎医学科目の上に演習や各領域の専門分野を積み上げることが必要である。しかし、基礎科目の知識理解が不十分なまま学生が進級し、臨地実習に出る頃になると学力、意欲に学生間格差が大きくなっている。・臨地実習に出るまでの知識理解の習得を考慮しておく必要がある。・より具体的なDPを策定すべき。・現在のDPについては何の不満もない。・国際社会で活躍する人材の養成という内容を入れれば良いと思う。・現行のDPはこれで良い。・学習のアウトカムや科目の達成レベルなどとコンピテンスごとに示せるようにすれば「絵に描いた餅」でなくなる。・医療人としての知識、態度、社会に貢献できる○○を養成することが重要。・医療従事者である以前に一人の人間として人望を集められる人間性を涵養する。・○○として医師と専門的な話ができる○○を養成する。・文章では理解しているが、日々の教育や授業まで考慮できていない。・現在のDPで問題はない。・教育の内容・目標などが的確に表されていて非常に良いと思う。・現状にDPに異論はない。・現行のDPに加え一社会人としての倫理観、基本的な学力や教養を身につけて欲しい。・求めるものと学生の能力のギャップが大きいものの、きちんとした目標を掲げることは大切である。・社会の変化や大学の实情に合わせて柔

軟に変化させたい。ただ軸はブレないように、卒業認定を受けて国家試験の受験資格が得られるので、それを第一に考えなければならない。まず学生に表裏のないマナーやモラルを身につけさせ、その上で生命医療に携わるための知識をしっかりと修得させていきたい。医療人として社会に役立つための知識を身につけることが大事。国家試験を目指して一方的にこちらから情報を与える授業になっている。本来であれば授業で得た知識を基にグループワークなどを行い、自分で考える力が必要であると思われる。何が重要なのか、なぜこのようになるのかなど、自分で考えられるような授業を目指したい。現在のDPは、あまり問題は無いと思う。そのDPを実践するには、1年生から学力と人間性を向上させる必要がある。各科目がカリキュラム・マップやカリキュラム・ツリーで関連づけられるようになり、これが各教員に浸透すれば各科目間の繋がりが強化されると思う。そこで初めてDPが活用され認識されるものとする。現行のDPが良いと思われる。態度や人間性を育てる授業はどの授業が該当するのか難しい。現在のDPは医療人として身につけて欲しい内容で問題はない。

## 付記

本稿は、大学教育学会第42回大会〈2020年6月6日(土)・7日(日)〉におけるポスター発表をもとに加筆・修正を加え執筆した(『発表要旨集録』, pp. 88-89)。

## 文献

- 中央教育審議会大学分科会：教学マネジメント指針(令和2年1月22日)。文部科学省, 2020.
- 河井紗央里, 新川達郎：学士課程教育における公共政策学教育の実質化のために—ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーをめぐって。同志社政策科学研究, 21(1): 63-76, 2019.
- 中央教育審議会：我が国の高等教育の将来像(答申), 2005. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm) (Access: 2020年5月26日)
- 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて(答申), 2008. [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) (Access: 2020年5月26日)
- 川嶋太津夫：ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆。名古屋大学高等教育研究, 8: 173-191, 2008.
- 松下佳代：大学カリキュラム。京都大学高等教育研究開発推進センター編：生成する大学教育学, ナカニシヤ出版, 京都, pp 25-55, 2012.
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会：『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー), 『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー)及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン, 2016. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/\\_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248\\_01\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf) (Access: 2020年5月26日)
- 安原智久, 河野武幸, 荻野喜代一：ファルマシア. 51(2): 143-144, 2015.
- 真名瀬陽平, 佐々木銀河, 田原敬ら：障害者差別解消法施行に伴う日本の国立大学におけるアドミッション・ポリシーの課題。大学教育学会誌, 39(2): 95-104, 2017.
- 水野(杉原)祐子, 池上貴美子, 吉井隆：ディプロマ・ポリシー達成度に対する自己評価アンケートの分析。甲子園短期大学紀要, 34: 49-59, 2016.
- 松本尚子, 大島弓子, 山根友絵ら：2015年度ディプロマ・ポリシー到達度評価—看護学生による自己評価アンケート結果の分析から—。豊橋創造大学紀要, 21(21): 153-163, 2017.
- 治部哲也, 小山秀之：保育士のストレスに関する質的研究—テキストマイニングを用いた職場のストレスの分析—。関西福祉科学大学EAP研究所紀要, 14: 25-31, 2020.
- 内田竜司, 児玉淳, 丸田道人ら：福岡歯科大学における学生のディプロマ・ポリシー・学士力の認知の程度と学修成果可視化への期待の程度について。日本歯科医学教育学会雑誌, 32(3): 155-165, 2016.
- 河井紗央里, 新川達郎：公共政策学教育におけるカリキュラムの実態—京都市の公共政策系学部3大学を事例に—。同志社政策科学研究, 21(2): 195-210, 2020.
- 久保田賢一：構成主義が投げかける新しい教育。コンピュータ&エデュケーション, 15: 12-18, 2003.

## Consciousness on the Diploma Policy of the Faculty Members of Meiji University of Integrative Medicine

Masataka Kawai, Satoshi Ichikawa

*Meiji University of Integrative Medicine, Basic Liberal Arts Course, Humanities and Foreign Language Unit*

### Abstract

We conducted an awareness survey on the diploma policy of each department at our university with the aim of obtaining basic materials for reconsidering the future diploma policy.

The survey was conducted on 106 faculty members of the university in October 2019 (recovery rate 48.1%).

Some of the results are as follows. First, most of the faculty members have some understanding of the diploma policy. Second, about 50% of faculty members are somewhat aware of the practice of the diploma policy in their lectures. Third, comparing the first-year students and the senior students, the student's academic ability image based on the diploma policy of senior students is about 60% more positive than that of the first-year students. Fourth, faculty members cite curriculum, knowledge accumulation, association, and the ability to show others as important keywords regarding diploma policy.

Overall, the faculty members' awareness of the diploma policy is positive, and in the future, the substance will be required in relation to academic management.

From this survey, we were able to understand the trends of our faculty members. In the future, it will be an issue to create a scaffolding for academic management based on the organic relationship with the three policies.